

育てられている時代に育てる子どもを学ぶ⑤

—高校生を学びの主体とした

「絵本読みあい実習」をとおした自分づくりへのとりくみ—

金田 利子

百瀬 愛

はじめに

今回は、高校生を主体とした実践の二回目にあたり
ます。先回は、親になるかならないかにはかわら
ず、大人としてすべての男女にとって欠かせない「親

性^{II}養護性」の育成についての実践をとりあげまし
た。今回はその基礎ともなる「自分づくり」、とりわけ
その前提となる自己信頼感の形成に視点を置いてとり
くんだ、「絵本の読みあい実習」の実践を百瀬愛さん
に報告して頂きました。

なぜ、高校生と「絵本」なのか、

「絵本の読みあい実習」に至るまで

私は現在浜松市立高等学校で家庭科教師をしています。静岡大学の保育研究室で学び、教師生活は八年目を迎えます。今の高校に赴任してからすでに、四年の歳月が過ぎようとしており、入学当初から担任をしてきた学年の生徒たちをいよいよ三月に卒業させます。

私にとって初めての卒業生ということもあり、今年度は進路指導で大忙しの毎日です。当校は、今年、盛大に「創立百周年記念」を行うという伝統ある女子校で、自主自律の精神を持った生徒たちの多い学校です。

1. 自分の生涯にかかわる「絵本」との出会い

私は、大学での卒業論文として「高校家庭一般において『国連子どもの権利条約』を取り扱う意義と可能性―高等学校における実験的授業実践を通して―」を

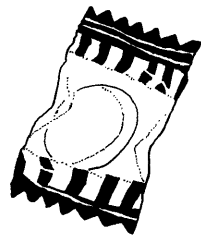
テーマに研究しました。

その中で中心軸となるものとして「青年期における自己信頼」というものに焦点をあて、常に自分

自身に対してもそれを当てはめていました。

その時、出会ったのがシルヴァスタイン作『ぼくを探しに』（倉橋由美子訳、講談社、一九七九年）という絵本でした。文字がほとんどなくシンプルな作品ではあるけれども、私に衝撃が走るほどの感動を与え、あまりの奥深さから、生涯自分の身に離さず持つていたい本になったわけです。

そして、教師になってからも家庭一般の授業において、「保育」がスタートする第一目の授業時に私が読み聞かせるという実践を毎年続けてきたのです。その授業では、毎年本の名前をあえて言わず、読み終わった後に生徒たち自身にタイトルを考えさせるよう



にしてきました。それは、生徒たち一人一人の感性、人生観を教師自身を知るよい機会となってきました。

2. 「絵本」の世界がさまざまな所で見直され

注目されるようになって

私が絵本に興味を抱くようになってから、新聞や雑誌などで、絵本についての特集、研究記事が目がいくようになり、授業中にも生徒たちと一緒に考える機会を設けました。

その中で、いくつか私自身が強く影響を受けた記事の概略を以下にまとめてみたいと思います。

一九九七年から二〇〇一年の間の記事で、特徴的な点をあげますと、以下の四点が見出されます。

* まず、次にあげました例のように、生きる手がかかりとしての絵本の可能性に養眼した記事に出会いました。

「……（前略）……絵本は、作るときも、読むときも自分で立ち止まることができ、『間』をもてる唯一のメディアではないか」それゆえ、「子どもたちの明日を生きる手がかり」になり、「お年寄りにとっては、いまここで生きている自分を感じ取る手立てになる」。

* そして、子どもや高齢者のみならず、働き盛りの大人に人気のある絵本に関する記事が目に残まるようになりました。気持ちをやまく言えない、コブタを主人公にした絵本（小泉吉宏作『コブタの気持ちもわかってよ』ベネッセコーポレーション、一九九七年）に反響が大きく、子どもの時に感情を押し込めた経験がコブタへの共感を呼んでいる、「疲れた時代」に癒されたいと願う大人たちの気分が背景にあるのではないかというものがそれに当たります。

* さらに、子どもの育ちにとって絵本はなぜ必要

なのかという意味を問う記事に出会えたことがあげられます。たとえば、「本はなくても子は育つが、育ち方が大分違うのではないか。……（中略）……思いをめぐらしあれこれ考える人間は、短絡しないし、一直線に事を運ばない。必然的に他者を思いやる」等の意見が共感を呼びました。

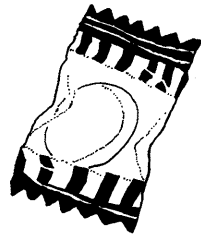
* もう一つが「読み聞かせ」から「読みあいへ」という変化について取り上げられていたことです。よく「読み聞かせ」というけれど、その願いは、絵本で楽しい時間を共有したいというものではないか。子どもと信頼しあい、心が通う。それが喜びにつながる。だから、「読みあい」という方が、意図をはっきりさせるのではないかというものです。

3. 前任校でのSくんと的交流から

私が新卒で最初に赴任した高校は男子生徒が圧倒的

に多い専門高校でした。

その高校では私が初の家庭科専任教師ということもあり何もない所からの教師生活のスタートでした。



ここでもやはり、家庭一般「保育」の授業の初日は、毎年『ぼくを探しに』の絵本を題名を自分で考えさせながら生徒の前で読みました。男子生徒の多い中で生徒の反応としては「先生は急になにをしようとしているんだらう」といった表情はしているものの、不真面目な態度ではなく心を傾けて聞き入ってくれました。

その中で、どのクラスの誰よりも反応がよく、真すぐに「先生！感動したよ。僕にはすごくよくわかるよ！」と大きな声で私に言ってくれたのがS君一人だったのです。

S君は、外見は今どきの洒落た高校生という感じの生徒でしたが、理解力に優れた物事を探究していくというタイプの生徒でした。しかし、時に不安定な面を見せることがあり、以前に「死んでしまいたい」といった走り書きのメモを突然渡されたことがありました。

本当に真剣に悩んでいたのか、私にただ甘えていたのかは今でもわかりませんが絵本の実習を行った時の彼の反応は、正しく私の心が伝わり通い合ったような嬉しさがあり、今でも鮮明に覚えています。そこでの私は確かに何か手ごたえのようなものを感じていた気がするのです。

絵本を取り入れていく授業のスタイルはこの時期を境にしてより明確なものになりました。そしてさまざまな国のさまざまなジャンルの絵本に出会い研究するために、少しずつ行動に移していきました。この時期が、もちろん自分の足で自分の目を使って自分の感性を頼りにして内容のよい絵本に出会うための旅の始ま

りでした。

「読みあい実習」実践の展開

この実践は、現任校の三学年の「選択保育」の授業で行いました。主に保育関係への進路希望者が選択しており、そうでない場合にも特に強く興味関心を持って選択してきている生徒が集まってきているため、大変とりくむ姿勢が積極的なクラスです。授業の内容も、さまざまに工夫し、実践的なものをできるだけとり入れるよう留意してきています。今年度の生徒数は、十六名と十七名の二つの集団からなり、週二回計三時間ずつです。

1. 方法

時間の設け方は「選択保育」の授業において、一年を通して毎時限から十分間をこの時間にあて順番に一人ないし二人がクラスのみんなに読み聞かせるとい

方法をとりました。読みあいに使う絵本は、これまで自分が育つ過程で読んでもらった絵本のなかで、最も好きで何度も繰り返し読んでもらった、自分にとって大変大切な意味を持つ本を中心に、生徒自身が選ぶようにしました。週二回計三時間の授業が一年間つづくので、この視点だけでは絵本が選びきれない場合には、家に眠っている昔懐かしい絵本、近くの図書館で借りる、きょうだいや知り合いから借りる等々情報の収集の方法についても示唆しました。

四月の授業のはじめにこのことを説明し、まず、本人にやってみたいという意志があるかどうかの確認のためのアンケートを実施します。これは、教師側から強制的にというのではなく、提案を教師がした場合にも、生徒たちに自分たちで授業を作っていくという意識を持つてほしかったからです。

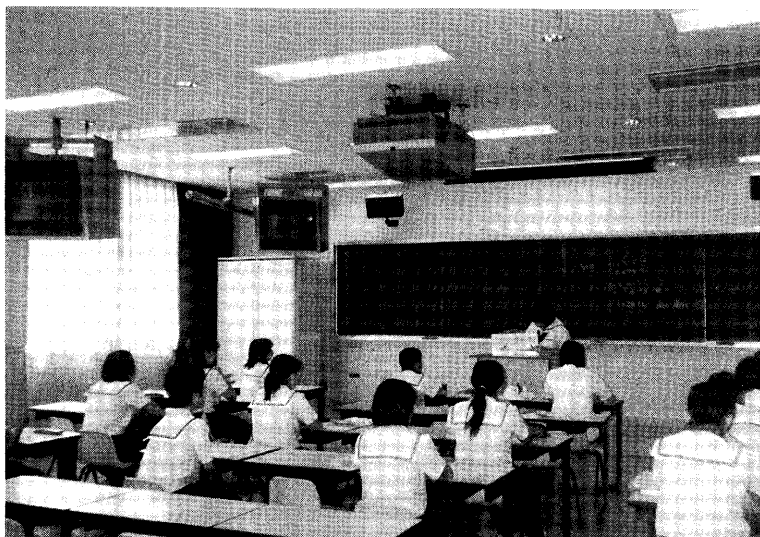
はじめはやってみてもいいという生徒から順番に発表者を決めます。途中からやってみたくなくなった生徒が

いたらもちろん次々に参加してもらいます。

毎回一人ないし二人ずつみんなの前で自分の選んだ本を読み聞かせます（写真1参照）が、最後に必ずなぜその本を読んだのか、自分の育ちとのかかわりについて、まず、読み手の生徒にエピソードなどを含めて紹介してもらいます。つづいて、数人の生徒に感想を発表してもらい最後に教師自身の実体験、思い出などを話しコメントを付け加えるようにします。

2. ねらい

なぜ、このようにしたかについては次のような考えからです。毎時間とおして十分間ずつ行っていくのは保育の心棒となる「自分づくり」を、保育の単元を学んでいる期間をとおして意識していけるようにという配慮であると同時に、毎時間「保育」の授業へ、主体的に参加できるように、導入の時間に、より人格に響く内容を取り入れたいと考えたからでもあります。



▲写真1 授業風景 聞き手はやがて読み手のまわりに集まってくる

また、自分自身の大切にしてきた絵本を紹介してもらうことを第一にしたのは、育ってきた過程をふりかえりつつ自分を見直し、自分史をみつめる契機として、「絵本の読みあい」が大変意味ある題材になるからです。直接には、なかなか語りえない、家族のことも含めた自分の育ってきた過程について、絵本をとおしてみんなに聞いてもらい共感しつつ友人を理解する場にもなるからです。

また、直接に自分の育った過程で読んでもらってきたわけではない絵本からも、他の人のコメントを聞きつつ直接体験した絵本とかわらせて、自分を振り返る契機になるのではないかと考えたからです。

3. 生徒の反応―自分づくりとのかかわりから―

この狙いは、命中しました。生徒たちはテレながらも絵本をとおして自分を語り始めました。

たとえば、『あきえ』という名のある生徒は、育っ

てきた過程をふりかえりつつ林明子作の『あさえとちいさいもうち』という本を読んだのですが、その後のコメントで次のようなことを語ってくれました。

「自分は家では姉の立場にあったためか、この本を何度も何度も読んでもらっていた。母はそのたびごとに、いつも、「あさえ」を「あきえ」に替えて読んでくれた。そういう母の気遣いを、今絵本とともに思い起こし、とても嬉しく思っている」と。これは、絵本を通して、親を対象化してみつめ、自分への思いを見直し、それを友人と共感しあうことができた事例です。

その他、人前で話すという体験が具体的に自信をつける力になったり、保育者になってからを意識する感想も含めて、これを契機にさらに自己信頼感に基づく自分づくりへの契機になっていくのではないかという感想が多く出てきています。

二、三の生の感想を上げておきましょう。

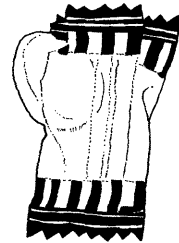
* 自分を見つめる契機
になっている感想

「絵本は子どもにも読み聞かせる、というイメージがあっただけど絵本実習をやったこの年でもたくさ

ん学べることもあると思った。子どもにとって絵本は見たことのない世界を知ること、想像力が豊かになると思いますが、私たちが読んでみてもそれは同じで、現実的な考えに固定されつつある気持ちをやわらげてくれていると思う。心温まる話も多いし、絵本を読むのは楽しい」。

* 友達と幼い頃を共有でき、友達の間から学びあえる

「自分が小さい頃に読んでもらったたり、他の人たちが小さい頃に読んでもらって好きな本を紹介しあえるの



でもとてもいいと思う」。「毎回いろんな絵本に出会うことができ、すごく楽しい。：（中略）：絵本の後にみんなの感想を聞くと自分が感じたことやそれ以外の事を知ることができ、いろいろな感じ方があることがよくわかるので、面白いです」。

* 育ちの過程に「絵本」の存在を発見し、親への感謝「絵本読みあい実習」の実習のために、家に絵本があるか調べたら十二冊のものが五セットで計六十冊もあったのに、びっくりした。たくさんあるので本を選ぶのは大変だったけれど改めて、親に感謝する思いになった」。

* 人前で読む恥ずかしさを越えて気づく、自分の新たな力と子どもに届く読み方や将来の保育者になるための自覚

「最初は人の前に出て読むなんて恥ずかしいと思って

いたが先生に指名されて（だが）、やってみると本当にいい勉強になったし、楽しかった」。「みんなの前で読むのは、少し恥ずかしくて、思ったより上手く読めませんでした。でも、子どもたちのまえでは、将来保育者になったときには、感情を込めて読まなければならぬので恥ずかしがってはいけなと思います。他のみんなが読んでくれるのは声がとても聞きやすいし、絵の見せ方も上手いので、その話で幼児に伝えたいことがよく伝わってきます」。

* 継続による絵本観の深まり

「絵本実習を始めた頃は内容が面白い本、絵がかわいくて親しみやすそうな本がいいと思っていたけれど、最近の絵本実習をやっていく中で、子どもに考えさせる絵本も良いと思った。私自身、絵本を通していろいろ考えることができるようになったので、そういう絵本をこれからも探していきたい」。

* みんなの感動を共通の表現（形）へ

—「ぐりとぐら」の人形づくり—

「絵本の読みあい実習」は、自分づくりへの契機になりそうなさまざまな感想ができましたが、言葉以外での表現要求も出てきました。どの生徒もが大好きな『ぐりとぐら』においては、みんなで人形を作ってみようということになりました。

私は、それを進めてみることにしました。それは、共通するみんなの思いを言語だけではなくいろいろな方法で表現すること。これは、自分のいや自分たちの思いの表現につながる、ここから一人一人みんなが持っている「ぐりとぐら」人形を用いて絵本をさらに立体的に表現したり、自分たちの思いを表現しあったり、幼児や学童など他の世代の人たちとかかわったり、自分づくりへの手立てになると思ったからです。

軍手という簡単な材料で全員一人一人のつくった「ぐりとぐら」人形の様子が写真2です。

4 「読みあい実習」時間における

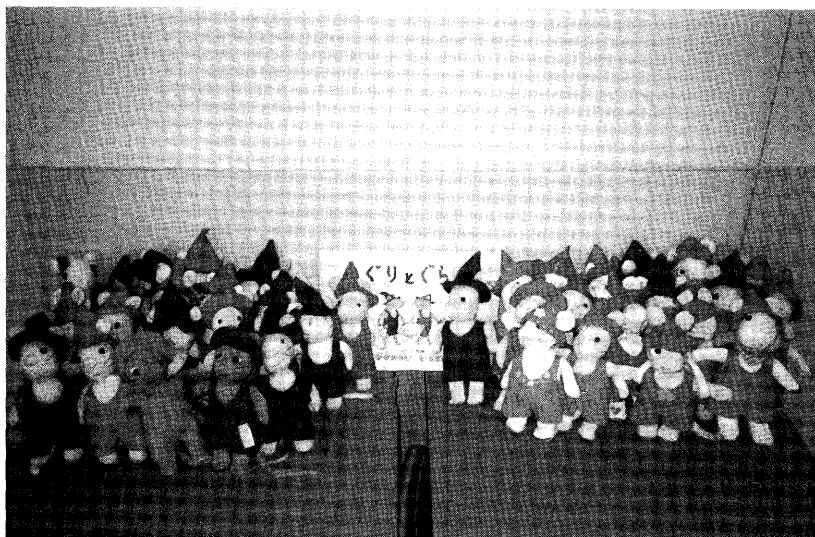
生徒のさまざまな変化

これまでは生徒の感想を中心に、主として認識面での成果を見てきましたが、今度は実習時間中の態度の変化を中心に生徒の変化をまとめてみたいと思います。

* 自主的に読み手になりたいという生徒が増えていった。自分たちで授業を展開していくという姿勢が芽生えてきた。

* 「絵本の読みあい」への期待の深化が見られた。たとえば、これは、当番になっていた生徒がうっかり絵本を忘れてきたときなど、今日はどんな絵本かと楽しみにしていた生徒たちが、非常にがっかりした姿を見せるようになってきた。

* 用紙の中の小さなコーナーに書く感想の字数行数が毎回増えている。米粒よりも小さい字で自分が感じ



▲写真2 授業で作った「ぐりとぐら」人形たち

取った思いをその場で書き残している。

* 聞く姿勢にも変化が見られた。少しでも絵本の周りで聞こうと読み手の周りに集まってくるようになった。

* 絵本をとおして自己（生徒たちの小さい頃のことや家族とのかかわりを話し）を語り始めるようになった。

* この実習への興味が深化した。今は授業の始まり十分間を当てているが、授業全部を使って「絵本実習」をやれないか、真顔で聞きに来た生徒がいた。

「絵本読みあい実習」をとおしての

教師自身の学びと自分づくりへむけての

今後の課題

私は「絵本」というものを介して生徒たちと心の交流をしてきましたし、これからもつづけていきたいと思っています。何よりも生徒たちに表現する力が十分

にあるということを実感できたことが嬉しいことでした。「国連・子どもの権利条約」では、第13条「表現・情報への自由」、第31条「文化的芸術的生活への参加」が保障されています。私は高校生たちも、自分を自由に表現する権利、さまざまな異文化や質の高い作品に触れ合う権利を持っていると考えています。

生徒たちが絵本を使って展開していく授業は、まさに高校生の直の声、生きた言葉を聞くことができ、活気に満ちあふれたり、または、心に深く浸透していく感動を味わうことのできる宝庫です。これから大人になっていく生徒たち、なかには職業として保育に携わっていく生徒たちと共有したかけがえのない時間を、私の財産としていきたいと思っています。

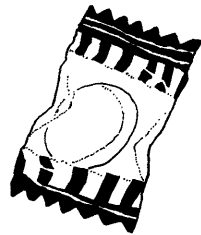
まだまだ、課題や問題点がありますが、絶えず向上心を持って、生徒たちが学びの主体となる、自分づくりの実践を研究していきたいと思っています。(以上百瀬)

おわりに

『子育てに絵本を』（山崎翠著、エーデル研究所）という本があります。

これには絵本を媒介に育てるものと育つものが共感しあひ心を通わせあうことについて述べられています。今まさに子育て中の人はもちろんですが、ここで見てきたように「育てられている時代に育てることを学んでいる」中・高生にとっても、絵本が大きな力になってきます。

金田は、このシリーズの(1)において、「育てられている時代に育てることを学ぶ」ことは「親性⇨養護性」の基礎を培うことであり、その内容は異世代と発展的にかかわる力の育成であり、さらにその根幹には、確固たる自己信頼感のある自分自身の育成(自分づくり)があると述べてきました。



この力の育成にとって、絵本はどんな意味を持ったのでしょうか。

百瀬さんの実践は、絵本の「読みあわせ」というところに特徴があります。教師と、同じく「保育」を選んだ友人同士が互いに読み手と聞き手になり、互いの選んだ本を通して共感しあっています。絵本の内容を媒介にそこに生まれた共感がクラスをつなぐ見えないうちになり、互いの理解と人間観を深めていっています。自分の将来就きたい保育者という職業の専門性にも目をやっています。

そこに生まれた共感がどうしても人形をつくってみたいという思いになり、百瀬さんは、表現力をつけることそれを、子どもの権利条約と関連させて述べておられるように、自己信頼感に根ざした自分づくりに必要な能力として位置づけています。その点で、今回は「絵本の読みあわせ」から「表現力」の育成へというところはよく展開されていますが、さらに言えば、

「表現力から自分づくりへ」の方向についても、一人の内面形成とかかわらせて、さらに実践的な研究を深めていかれるといっそう「絵本・表現力・自分づくり」の関係が明確になるように思います。

また、毎時間必ず、初めの十分間にこのとりくみを続けられたことは、簡単なようではなかなかできない、意味深い実践ではないかと思えます。ここから、家庭科はもちろん人間の生きる原点として総合的な課題がどんどん生み出され、生徒も教師もそして間接的には父母も含めて人間的に育ちあえる自発的な学びの拠点づくりになっているのではないかと思えます。

金田（静岡大学）

百瀬（浜松市立高等学校）